

# JF 日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発

来嶋洋美・柴原智代・八田直美

〔キーワード〕 JF 日本語教育スタンダード、教材開発、外国語としての日本語教育、CEFR、国際交流基金

## 〔要旨〕

国際交流基金では JF 日本語教育スタンダードを教育現場でどう適用するか具現化すると同時に、海外拠点における日本語講座での使用のために、準拠教科書の開発に取り組んでいる。新しい教科書は相互理解のための日本語教育を実践するために、日本語だけでなく異文化理解の学びを取り入れる。学習対象は海外の成人学習者である。JF スタンダードに準拠するために、レベル設定、Can-do による学習目標、トピック、異文化理解の学習、ポートフォリオを取り入れ、2011年5月には『まるごと一日本のことばと文化―入門 A1』試用版を刊行した。コミュニケーション言語活動中心の「活動編」と、コミュニケーション言語能力（語彙、文型など）を中心にした「理解編」、そしてトピック別「語彙帳」で構成される。活動編と理解編は各々主教材として開発したが、トピック構成が共通で、相互補完的にも使用できる。本稿ではその開発の枠組みと内容・構成について報告する。

## 1. はじめに

国際交流基金（以下、JF）は日本への理解と国際相互理解の増進のために文化芸術交流、日本研究・知的交流、日本語教育の3領域において国際交流事業を行うことを設立目的としている。海外における日本語教育支援事業においては、1970年代より主教材、ビデオ教材、写真パネルバンク、素材集、インターネットなど多様な媒体、内容の教材を開発してきた。特に主教材としては1981年に『日本語初歩』、1990年に『日本語中級』を出版、1990年代以降は、現地の状況にあった教科書開発のための素材集や教授法参考書に力を入れてきた<sup>(1)</sup>が、2005年には中等教育の学習者数増大に応じて映像教材『エリンが挑戦！にほんごできます。』を制作した。このように JF では初期の頃から一貫して海外の日本語教育のニーズに応えるという形で教材開発を行ってきた。

その後、2010年5月に「JF 日本語教育スタンダード2010」（以下、JF スタンダード）が5年がかりのプロジェクトの成果として公開された。JF スタンダードは国際交流基金の理念「国際交流」と「相互理解」を受けて、欧州の CEFR（Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment）を参考にして作られた日本語教育の教授、学習、評価のツールである。JF スタンダードの開発を機に JF の日本語教育はこれにそって再考し、改

善を加えることになった。また、JFスタンダードを教育現場でどう適用していくか、準拠教材を作成して具体的な実践モデルを示すことものもぞまれた。一方、JF海外拠点においては日本語教育事業のさらなる発展のために日本語講座を新設、拡充することになり、そのための教科書開発の必要性が高まった。海外における日本語教育を支援するという目的のもと、JF自身の日本語教育に対する基本的な考え方をJFスタンダードという形で打ち出し、それに準拠する教科書で具体的な方法を発信するという、積極的な事業展開を図ろうとしているわけである。

本稿では、このような経緯で平成23(2010)年度から開発に取り組んでいるJFの新しい日本語教科書、『まるごと一日本のことばと文化ー』の開発理念と内容、構成の概要を報告する。

## 2. 新しい教科書開発の大枠

新しい教科書開発にあたっては以下の4つの点が前提になっている。

### 2.1 教材の理念：相互理解のための日本語

JFの日本語教育は、国際交流を通して相互理解が実現することを目指す。そのためには、コミュニケーションのための日本語力と文化理解、つまり、ことばと文化の両面が必要になる。そこで新しい教科書は日本語だけではなく、文化も同時に学べる教科書として作成する。日本語は日本人だけに属するものではなく、国籍、民族を超えた日本語使用者のコミュニケーションに資する言語として捉える。さらに、人類共通の資産としての日本文化への理解、それを通しての自文化を含むあらゆる文化への複合的視野の涵養を目指すものである。

### 2.2 学習者：海外の一般成人

新しい教科書はJF海外拠点における日本語講座の学習者を含む、海外の一般成人を主な学習者として想定する。従来、日本語教育は国内外において、留学や就職、試験合格などを目的としたカリキュラムで行われることが多かった。しかし国際交流基金による2009年の海外日本語教育機関調査によれば、学校教育以外の学習者の学習目的は日本語そのものへの興味、コミュニケーション、アニメ・マンガ、歴史・文学など、趣味・教養系もまた上位を占めている。新しい教科書は、実利的な目的だけでなく、日本語を気軽に勉強してみたい、日本について興味があるから学びたい、外国語学習を楽しみたい、という学習動機に応えられることを目指す。相互理解のための日本語教育を展開する上で、より多くの人々に学ぶ機会を提供する必要があるからである。

### 2.3 JF 日本語講座のコースブック

新しい教科書は JF 海外拠点における日本語講座のコースブックとして使用する。コースブックとは、日本語コースで教える内容と方法を教材化して、教える順に表したものである。

従来の初級日本語教科書は、国内外を問わず構造シラバス系のものが主流を占めてきた。ここでは文型を出発点とした導入、練習が展開され、会話形式の活動も文型定着の目的から外れないように作られている。そのため多くの場合、日本語コースの学習者は教科書にそったこのような方法による日本語授業を受けることになる。しかし、成人学習者はニーズも言語学習の背景も多様であり、それに応えるには、例えば文字学習の負担の軽い会話中心のコース、日本語の構造理解中心のコースなど、コース設定に柔軟性が求められる。新しい教科書をコースブックとしてより効果的に機能させるために、学習目的別のコース設定をしやすくする工夫を考える。

### 2.4 JF 日本語教育スタンダード準拠

新しい教科書に求められる点として最も重要なポイントは、JF スタンダードに準拠することである。前述したとおり JF スタンダードは「相互理解のための日本語」を理念とした日本語教育のためのツールである。ここでは、相互理解のためには日本語を使って何がどのようにできるかという「課題遂行能力」と、さまざまな文化に触れることでいかに視野を広げ他者の文化を理解し尊重するかという「異文化理解能力」が必要であるとしている。言語教育を実践するための方法は CEFR を土台にしており、6段階の熟達度、言語コミュニケーションを構成する活動や能力の考え方、「Can-do」と呼ばれるコミュニケーション行動の表し方、学習成果の記録と保管のためにポートフォリオを使うことなどの特徴がある<sup>②</sup>。新しい教科書は JF スタンダードを実践した場合のより具体的なイメージを伝えるために、これらの特徴を取り込む。

## 3. 新しい教材と JF スタンダード

JF スタンダードに準拠することとはどういうことなのか。教科書の中で具体化すべき点を以下のように考えた。

### 3.1 言語熟達度によるレベル設定

新しい教科書のレベルは JF スタンダードの6段階（A1～C2）の言語熟達度によるものとする（表1）。言語熟達度は、「A：基礎段階の言語使用者」、「B：自立した言語使用者」、「C：熟達した言語使用者」の3つの大きな段階があり、各段階がさらに2つに分かれる（資料1参照）。新しい教科書ではレベルのイメージを日本語でわかりやすく示すために、入門、初級、

などの呼称を以下のように対応させる<sup>(3)</sup>。

表1 JFスタンダードのレベルと新教科書での呼称

| JFスタンダード<br>のレベル | 新教科書の<br>レベル呼称 |                                   |
|------------------|----------------|-----------------------------------|
| A 1              | 入門             | 基礎的段階<br>・あいさつ、定型表現<br>・日常生活のやりとり |
| A 2              | 初級1            |                                   |
|                  | 初級2<br>(初中級)   |                                   |
| B 1              | (中級)           | 自立段階                              |
| B 2              | (中上級)          |                                   |
| C 1              | (上級)           | 熟達段階                              |
| C 2              | (上級)           |                                   |

( ) 内は仮

JFスタンダードはCEFRを土台に開発されているので、そのレベル設定に準拠することは、CEFRと共通のレベルを使用することを意味する。従って、CEFR準拠の教科書やコースであれば、日本語以外の言語との対照が可能である。他国の文化機関による外国語講座や、書店の外国語教科書の陳列棚に並ぶ書籍にCEFRのレベル表示がある場合は、JFスタンダードと共通のレベル基準と見て差し支えない。

### 3.2 課題遂行 (Can-do) での学習目標を立てる

JFスタンダードでは、2.4で述べた「課題遂行能力」をさらにコミュニケーション言語活動とコミュニケーション言語能力という2つの概念で表す。コミュニケーション言語活動は言語を使った産出、技能、やりとりにおけるさまざまな活動を40のカテゴリーに分類したものである。コミュニケーション言語能力は文法、語彙、表記、音声などの言語構造能力や社会言語的能力、語用能力などを含む13のカテゴリーからなり、コミュニケーション言語活動を支える能力として位置づけられている<sup>(4)</sup>。これらは「～することができる」という行動や活動を表す文の形で記述されているところに特徴がある。JFスタンダードにはCEFR由来の493のCan-doと新規作成した342のJF Can-doがある。以下にA1のCan-doの一例を示す。

例 「非常に短い、準備して練習した言葉を読み上げることができる。例えば、話し手の紹介や乾杯の発声など。」(A1)

コミュニケーション言語活動>産出>カテゴリー：⑩講演やプレゼンテーションをする

新しい教科書は、JF スタンダードの Can-do を参照して学習目標を設定する。つまり各課の学習目標が行動記述文で表される。入門者でも 1 回目の授業から日本語によるコミュニケーションを経験できるような授業設計をするためである。さらに、A1、A2 の教科書においては、コミュニケーション言語能力とコミュニケーション言語活動という言語の捉え方で教科書の全体構成を考えることにする。

### 3.3 異文化理解の学習を促進する

JF スタンダードでは、相互理解のためには日本語力だけではなく、異文化理解の能力も必要としている。Can-do は課題遂行能力の例示のためのツールとして使われているので、異文化理解のための例示は特にないが、異文化理解能力が相互理解のために必須であることは明白に宣言されている。またポートフォリオを利用した異文化理解学習の方法も提案されている。新しい教科書は、来日経験のない学習者を含む海外の学習者のために、日本の文化について学べるようにすること、さらに、日本文化を素材に学習者自身の文化にも考えを発展させ、異文化理解能力を養えるようにすることを目指す。また、各拠点における文化事業との連携を通して、学習者の文化体験をより豊かにしていけるような工夫を取り入れる。

### 3.4 ポートフォリオ

JF スタンダードが提案するポートフォリオとは、課題遂行能力の達成度を記した評価表、作文などの学習成果、及び言語的、文化的体験の記録を保存するものである。これによって学習者は自分の学習がわかりやすく見えるようになり、学習の自己管理がしやすくなる。講座での学習期間中はもちろん、自身と日本との関わりを記録し続けることで、生涯学習を自己管理するという機能を持たせることも可能である。このポートフォリオを使った学習のしくみも取り入れる。

### 3.5 トピック

JF スタンダードには学習内容を考える際に参照する15のトピックがある（表2）。2.2で述べたとおり海外の学習者の日本語学習目的は趣味・教養系のものが上位を占めているが、その興味、関心を具体的にコースブックの内容として表していく上で、トピックを利用することは有効と思われる。文法や句型などの言語項目からではなく、学習者が知りたい内容から出発した学習を設計することが可能になるからである。また各レベルの教科書を順次作成していく上で、レベル間の内容的関係性を調整していく上でも、トピックの切り口が必要になる。

表2 JFスタンダードの15のトピック

|           |          |            |
|-----------|----------|------------|
| 1 自分と家族   | 6 旅行と交通  | 11 人とのつきあい |
| 2 住まいと住環境 | 7 健康     | 12 学校と教育   |
| 3 自由時間と娯楽 | 8 買い物    | 13 言語と文化   |
| 4 生活と人生   | 9 食生活    | 14 社会      |
| 5 仕事と職業   | 10 自然と環境 | 15 科学技術    |

以上、「相互理解の日本語」のためのJFスタンダードの5つの特徴を教科書に取り込むことを念頭に、教科書の設計にとりかかった。

#### 4. JFスタンダード準拠A1教科書の開発状況

2章、3章で述べた大枠のもと、新しい教科書開発プロジェクトの皮切りとして2010年度にA1レベルのJFスタンダード準拠教科書を制作、試用版として2011年5月に刊行した。教科書の名称は『まるごと一日本のことばと文化— 入門 A1』（以下、『まるごと A1』）とした。以下にその概要を報告する。

##### 4.1 作業工程（実績）

『まるごと A1』を作成するのに要した期間はプロジェクト開始日からおよそ1年である（表3）。当初作成チームは2名、その後1名加わりA1教科書は3名で開発にあたった<sup>(5)</sup>。開発者は全員、日本語教育現場での実践、教師に対する研修、海外拠点での日本語教育経験を有している。JFスタンダードという今までにない新しい枠組みを適用しての開発であること

表3 『まるごと A1』教科書開発の作業工程

|            |  |
|------------|--|
| 2010年4月～6月 | 準備：JFスタンダード、CEFR 関連書類、他言語のCEFR準拠教材の分析、教材全体構想とA1シラバス作成、教材プロトタイプ作成 |
| 7月～9月      | A1「活動編」と「理解編」執筆  |
| 10月～       | 編集、校閲／校正<br>「語彙帳」原稿作成、編集、校閲／校正                                   |
| 2011年2月    | 海外拠点でモニター調査／アンケート調査  |
| 3月         | 「活動編」「理解編」音声収録<br>(東日本大震災の影響を受け、作業一時中断)                          |
| 5月         | 印刷・刊行  |
| 6月         | 教師用リソース集（内部資料）配布   |

から、工程各段階での作業量や内容に予測しづらいこともあったが、2010年度内の刊行を目指して作業を進めた。

## 4.2 『まるごと一日本のことばと文化― 入門 A1』（試用版）

### 4.2.1 概要

『まるごと A1』の概要は以下のとおり。

- ・対象者：海外の日本語学習者（一般成人）
- ・教師：日本語を母語とする教師または母語としない教師
- ・教科書のレベル：A1 入門レベル〔資料1〕
- ・教科書の基本構成：
  - ①主教材1「活動編」(音声 CD 付、全141頁) ②主教材2「理解編」(音声 CD 付、全191頁)
  - ③「語彙帳」 ④教師用リソース集（内部向け限定配布）
- ・使用言語：日本語（ローマ字併記）
- ・その他：JF 海外拠点における日本語講座のコースブックとして使用する。

従来の教科書と一見して違うのは、A4版でフルカラー、写真やイラストが多用されていることであろう。これによって日本文化を伝えたり、学習を楽しく効果的に行ったりすることができる。さまざまな年代、人種、性別のメインキャラクターも設定されており、学習者の代わりに教科書の中で日本語によるコミュニケーションを体験していくようになっている。〔資料2〕

### 4.2.2 2つの主教材：コースブックとしての『まるごと A1』

『まるごと A1』は、一般成人学習者のニーズにきめ細かく対応したコース設定をするために、「活動編」と「理解編」の2つの主教材と、「語彙帳」からなる。表4にその全体構成と想定した学習者の状況を記す。

活動編はコミュニケーション言語活動を中心に学ぶ教材。場面や目的にあった自然な日本語の使い方と日本の文化に関する事象を学ぶ。日本語を実際に聞いたり話したりしながら、日本語でコミュニケーションができるようになることを目指している。

一方、理解編はコミュニケーション言語能力のうち特に言語構造能力（文字、語彙、文法、句型）の学習を中心にしたもの。言語構造能力中心と言っても、コミュニケーションを最終目的とするので、4技能を積極的に使った教室活動で構成されている。

活動編と理解編は各々、どちらか一方を単独で学びたい学習者のニーズに対応する。両者はトピック、モデル会話、言語項目などは共通しているが、学習目的が異なるため、教室活動も

異なる。一方で、学習目的が相互補完的なので、学習者は両方のコースで学習することで、総合的に学ぶこともできる。

語彙帳は、各コースの学習に役立てられるように、活動編と理解編の語彙および教科書外の関連語約1000語をトピック別に記載してある。

表4 『まるごと－日本のことばと文化－ 入門 A1』の教科書と学習者

| 教科書 | 目的／内容  | 想定される学習者のニーズ／状況   |
|-----|--|---|
| 活動編 | コミュニケーション言語活動中心<br>場面や目的に合った日本語の使い方<br>と日本の社会文化を学ぶ。                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語をすぐに使ってみたい。</li> <li>・簡単な日本語がわかるようになりたい。</li> <li>・忙しくて学習時間が限られているので、会話から練習したい。</li> <li>・文法はわかっているが、話すのが苦手。</li> <li>・日本語を習いたい、文字学習が負担で躊躇している。</li> </ul> |
| 理解編 | コミュニケーション言語能力中心<br>コミュニケーションをささえる言語<br>構造<br>(文字、語彙、文法、文型、など)<br>の学習 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語の構造や語いを勉強したい。</li> <li>・中級以上になるまで日本語を続けたい。</li> <li>・滞日経験があるなどして日本語が話せるが、文法や読み書きの能力が不足している。</li> <li>・文字学習にも取り組みたい。</li> </ul>                             |
| 語彙帳 | 活動編と理解編の単語を中心に約<br>1000語をトピック別にまとめた小冊子。<br>入門期の学習者の辞書がわりになる。         |   |

以下、活動編と理解編の各々の内容、構成を述べる。

#### 4.2.3 活動編の内容・構成

- ・目標：A1レベルのコミュニケーション行動（課題）ができるようになる  
教科書がとりあげるトピックに関連した日本文化について知る
- ・全体構成：9トピック18課＋テストとふりかえり2回(トピックとその配列は理解編と共通)
- ・想定授業時間：30時間（1課90分）
- ・各課の学習内容と構成：



JF 日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発

JF スタンダードの A1 レベルの Can-do を参照して、教科書のトピックにあった Can-do に書き直したり、新規に作成したりした。この Can-do を学習者用に平易な日本語で表現し、「ないよういちらん」とした(表5)。同じ Can-do で学習者用の自己評価チェックリストも作成した<sup>6)</sup>。

表5 「ないよういちらん(かつどうへん)」一部抜粋

| トピック     | もくひょう Can-do   | おもなひょうげん  |
|----------|--|---|
| 2<br>わたし | だい3か どうぞ よろしく<br><input type="checkbox"/> じぶんの ことを かんたんに はなします<br><input type="checkbox"/> めいしを よみます       | ・はじめまして、(やまだ)です。<br>どうぞ よろしく おねがいします。<br>・おなまえは?/どちらから?/おしごとは?<br>・にほんごが できますか。 |
|          | だい4か かぞくは 3にんです<br><input type="checkbox"/> かぞくの ことを はなします<br><input type="checkbox"/> かぞくの しゃしんを みて はなします | ・この ひと は だれですか。<br>・おいくつですか。<br>・どこに すんで いますか。                                  |
|          | 社会文化 かぞくの いいかた   |   |

活動編各課の構成は次の通り。

表6 活動編 各課の構成

|               |   |
|---------------|---|
| トピックのとびら      | トピックと Can-do の紹介。                               |
| きいていましょう      | 語彙と場面の紹介。                                       |
| ききましょう        | 話すモデルとしての会話を聞くタスク。<br>音声と表現にバリエーションあり。          |
| ペアではなしましょう    | モデル会話の流れにそって自分のことを話す。                           |
| よみましょう/かきましょう | 現実に目にする文字を読む。/簡単な表現を書く。                         |
| 社会文化          | トピックに関連した写真。自国文化や自分自身と比較しながら、話し合う。母語や媒介語の使用を想定。 |
| Can-do チェック   | 各課の授業後に3段階で自己評価する。                              |

活動編の大きな特徴としては以下のことがある。

- ① ひらがな、カタカナにローマ字ルビをつけて、文字学習の負担を軽くしている。文字を書く活動は極めて限られている。これは入門者が文字学習の負担感なく日本語や日本文化の学習に取り組めるようにするためである。
- ② 海外において特に不足しがちな音声によるインプットを重視している。学習者が自然な日

本語を聞けるように、縮約形や助詞の省略、倒置など、音声と日本語の表現の上でのバリエーションをつけた。

③ 相互理解のための会話： 実用会話と交流会話

『まるごと A1』の会話作成にあたっては、日本語の使用場面や状況が海外の学習者にとって違和感なく受け入れられるものであること、また、様々な世代や背景をもつ成人学習者にとって共感できたり、楽しめたりできるような内容にすることに留意した。会話の内容は、日本滞在中に買い物やタクシー乗車などの実用場面で行う会話と、日本語話者との交流会話になっている。交流会話とは趣味が何かたずねるなど、機会があれば話すようなことで、互いを知り合うためのコミュニケーションの会話である。

④ 異文化理解のために「社会文化」のページを特に設けている。そこには、日本の文化的事象を自国の文化や自分自身のことと比較しつつ、理解を深められるような質問を配した。またそのための話し合いは母語や媒介語で行うことを前提にしている。そのほか、本編の写真(物、人)会話の内容や場面・設定状況、多様な文化背景・世代の登場人物にも異文化理解のためのヒントが盛り込まれている。さらに、教室外での異文化理解体験を奨励するためのリソース<sup>7)</sup>を教師用に配布。学習者は自分の異文化体験を記録し、ポートフォリオに保存、コース中間と期末の「ふりかえり」のセッションのときにそれを利用して、各自の体験を報告しあうことになっている。

⑤ 異文化体験の記録のほか、誕生日祝いのカードなどの書くタスクの成果と Can-do チェックリストもポートフォリオに入れる。これも異文化体験の記録と同様「ふりかえり」セッションのときに利用する。

#### 4.2.4 理解編の内容・構成

・目標：A1レベルのコミュニケーション言語能力を養う

(コミュニケーション活動を支える言語形式や語いを体系的に学習する)

・全体構成：9トピック18課+テストとふりかえり2回(トピックとその配列は活動編と共通)

・想定授業時間：40時間(1課120分)

・各課の学習内容と構成：

理解編の目標は言語能力の学習であるが、JFスタンダード/CEFRの言語能力のCan-doは汎言語的に抽象的な表現で書かれている。そこで『まるごと A1』では、文型の形で内容一覧を表すことにしたが、文型はコミュニケーション言語活動を支える言語能力として捉える。したがって、言語能力の学習が中心といっても、最終的にはあくまでも言語活動につなげることを前提に学習を展開する。そのため、モデル会話、読解文、作文のまとまったテキストを利用して、文脈のある中で文型や語彙を学習するようにした(表7)。さらに内容一覧にある文

型を自己評価項目として「にほんごチェック」も作成した。

表7 「ないよういちらん (りかいへん)」一部抜粋

| トピック     | か                     | もじとことば               | かいわとぶんぼう きほんぶん  | どっかい          | さくぶん          |
|----------|-----------------------|----------------------|---|---------------|---------------|
| 2<br>わたし | だい3か<br>どうぞ<br>よろしく   | ・くに<br>・ことば<br>・しごと  | ・わたしは <u>カーラ</u> です。<br>・わたしは <u>にほんご</u> が <u>できます</u> 。<br>・わたし <u>も</u> エンジニアです。           | 「ふたりの<br>ことば」 | 「じこしょ<br>うかい」 |
|          | だい4か<br>かぞくは<br>3にんです | ・かぞく<br>・ひと<br>・にんずう | ・かぞくは <u>ちちと</u> ははと わたしです。<br>・あねは <u>おおさか</u> に <u>すん</u> でいます。<br>・あねの <u>こども</u> は 2さいです。 | 「わたしの<br>かぞく」 |               |

※漢字はトピック3から導入。

理解編各課の構成は次の通り。

表8 理解編 各課の構成

|            |                                |
|------------|--------------------------------|
| トピックのとびら   | トピックと基本文型の紹介。                  |
| べんきょうするまえに | 学習する内容についての質問。(母語使用)           |
| もじとことば     | 語彙と文字の練習。語彙帳を参照する。             |
| かいわとぶんぼう   | 文型を使ったモデル会話、文型の提示と練習問題。        |
| どっかい       | 文型と語彙の定着練習として課の内容に関連した短い文章を読む。 |
| さくぶん       | 文字をなぞって練習する。課の内容に関連した短い文章を書く。  |
| にほんごチェック   | 文型学習を自己評価する。                   |

理解編の大きな特徴としては以下のことがある。

- ① 前半はひらがな、カタカナにローマ字ルビをつけて、文字学習の負担を軽くしているが、後半のルビは限定的使用になる。漢字も導入される。ひらがな、カタカナは読み・書きとともに学習目標になっている。
- ② 理解編も活動編と同様、海外で不足しがちな音声によるインプットを重視する。文型練習問題に聴解問題を組み込んだり、答えのチェックを音声を聞いて行うなどの活動を提案している。
- ③ 活動編と類似した会話が文型提示の目的で使われているので、学習者が両方のコースをとった場合にも、関連付けて学習しやすい。また文型練習はトピックや会話内容に合わせた文脈の中で練習するようにしている。
- ④ 作文の成果とにほんごチェックリストはポートフォリオに保存し、コース中間と期末の「ふりかえり」のときに使用する。特に作文は自宅での作業になる可能性が高いと思われるので、クラスで披露する機会を作って、学習動機につなげる。

理解編は異文化理解のためのページを特に設けてないが、活動編と同様、本編の写真、会話の内容や場面・設定状況などからも異文化理解を学ぶためのヒントが含まれている。また、前項で述べた、教師用に配布した教室外での異文化理解体験を奨励するためのリソースは活動編のみならず、理解編の学習者への使用も想定している。

## 5. 今後の計画と課題

以上、JFスタンダードに準拠した新しい教科書の開発の枠組みと開発状況を報告した。今後の計画としてはA1に続くレベルの教科書を作成することが最優先事項としてある。2011年度内にA2レベルの第1分冊(試用版)を刊行する予定である。また、『まるごと A1』から順次、海外拠点における試用を通して得られるフィードバックをもとに、改善を加えていく。

さらに、教師たちが新しい枠組みの教科書について理解して使えるようになるための方法やしくみを考え、実行していくことも不可欠であろう。『まるごと』はコースブックである点において、各拠点における講座設定、運営と密接に関係している。JFがJFスタンダード準拠の日本語教育事業を展開していくためには、教材作成チームだけでなく、関係部署が一丸となって、この新しい教科書を使った新しい講座を作っていくことが肝要と思われる。

印刷媒体のコースブックとあわせて、学習者支援サイトの構築にも取りかかっている<sup>(8)</sup>。『まるごと』コースブックの世界がさらに広がることが期待される。

## 6. おわりに

『まるごと—日本のことばと文化—』は、相互理解のための日本語とは何かということが理念的出発点になっている。国際交流の場が人々の相互理解の場となるためには、入門期から言語と文化の両方を学ぶ日本語教育が必要であると考え、さらに、それを教科書という媒体で具体的にどう表現すればいいのか検討を重ねつつ作業を進めているところである。

一方で、日本国内における日本語教育にも変化が見られる。初級日本語教育が従来の文型学習中心からコミュニケーション中心になるにつれて、学習目標の設定方法も言語項目の記述から、コミュニケーション活動の内容を記述する教科書が見られるようになってきた。ものの見方・考え方が大きく変化しようとしているこの時代に、新しい教科書『まるごと—日本のことばと文化—』もまた、新しい日本語教育を切り拓くことに貢献できればと思っている。

〔注〕

<sup>(1)</sup>例えば『教科書を作ろう』や『みんなの教材サイト』など

<sup>(2)</sup>このようにCEFRを土台にすることによって、JFの日本語教育はCEFR準拠の他の外国語教育との比較対照が可能になる。日本語教育を世界の国々と共通の枠組みで展開していけることは、日本語教育の質

## JF 日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発

の向上とともに関係者間の交流を促進することにもなるだろう。

<sup>③</sup> B1、B2レベルの教科書開発は2012年度以降の予定。C1、C2レベルについては未定。

<sup>④</sup> JFスタンダードでは、コミュニケーション言語能力と言語活動の構成要素が「JFスタンダードの木」で表現されている。言語活動のCan-doは活動Can-do、能力Can-do、方略Can-do、テキストCan-doの4つに分類され、各々に例示的記述文がある。例示的記述文は「みんなのCan-doサイト」で検索できる。

<sup>⑤</sup> 筆者ら3名（来嶋、柴原、八田）。

<sup>⑥</sup> かな文字表記の日本語文をできるだけ少ない文字数でおさめるため、「ないよういちらん」も「Can-doチェックリスト」も一文一文を「～できる」という書き方にはしていない。

<sup>⑦</sup> 「文化体験の記録シート」の例、現地でする文化体験のアイデアをリスト化した「文化体験一覧表」の例、『まるごと A1』のトピックと関連させて見ることができるウェブ版『エリンが挑戦！にほんごできます。』の内容との照合表など。

<sup>⑧</sup> 『まるごと』の学習者支援サイトは2011年秋に開発に着手した。

### 〔参考文献／参考サイト〕

国際交流基金（2007）『平成17年度日本語教育スタンダードの構築をめざす国際ラウンドテーブル 会議録』

—————（2009）『JF日本語教育スタンダード試行版』

—————（2010a）『JF日本語教育スタンダード2010』

—————（2010b）『JF日本語教育スタンダード2010 利用者ガイドブック』

Council of Europe（2004）『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』吉島茂・大橋理枝（訳・編）、朝日出版社

国際交流基金「2009年海外日本語教育機関調査」

<<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/index.html>>

国際交流基金「第10回海外日本語教育研究会 第1部 資料 「日本語国際センターの教材開発の変遷」」

<[http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/chek/wld\\_03\\_22\\_01.html](http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/chek/wld_03_22_01.html)>

国際交流基金「JF日本語教育スタンダード」サイト

<<http://jfstandard.jp/top/ja/render.do>; jsessionid=8EA3B246169DA0B7173C8005238F02EC>

国際交流基金「みんなの「Can-do」サイト」<http://jfstandard.jp/portfolio/ja/render.do>

サイトはいずれも2011年9月30日参照

### 〔資料1〕CEFR 共通参照レベル：全体的な尺度

|    |   |
|----|---|
| A1 | <ul style="list-style-type: none"> <li>具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。</li> <li>自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりできる。</li> <li>もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船を出してくれるなら簡単なやりとりをすることができる。</li> </ul> |
| A2 | <ul style="list-style-type: none"> <li>ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。</li> <li>簡単に日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。</li> <li>自分の背景や身の回りの状況や、直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる。</li> </ul>                       |



